
聖夜だよ！！ 全員集合！！

伊之口浩作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖夜だよ！！ 全員集合！！

【Nコード】

N3022A

【作者名】

伊之口浩作

【あらすじ】

白狼一家が聖夜の元、全員集合を果たす。そこで繰り広げられる、血で血を洗う壮絶な物語（一部誇張アリ）そして、最後には小さな感動秘話も。笑撃の風画シリーズ第三弾！！

恐怖のエアメール（前書き）

久々に風画シリーズを書きます。このところ「イブ」ばかり書いてたので、その反動からか文章が乱れまくったりしてます。その点を黙殺していただければ、クスリと来ること間違いなし!!ごゆるりどうぞ。

恐怖のエアメール

クリスマスイブの朝、風画の家に一通のエアメールが届いた。

「なんだこりゃ？」

歯ブラシを口に突っ込んだ風画は、おもむろに封筒の封を解く。

「……」

便せんを手に取り、何気ない表情で読み進める。しかし、ある一文を読み終えたとき、風画の顔が見る見る蒼白していった。

「ん、風画じゃん。どした、借金の取り立て電報でも読んだツラして」

風画の兄・海雅もまた、歯ブラシを口にくわえて現れた。海雅は風画から便せんを取り上げると、風画と同じように内容を読んだ。

「……。あ！　なんだこれ……。おい！　なんだこりゃ！」

海雅の顔も蒼白してゆく。

「兄貴……。ヤバイよな、これ……」

風画は首だけを海雅に向けると、弱々しく訊いた。

「ああ……。軽く……。いや、かなりヤバイ……」

某缶ビールのCMの様に言って、海雅は便せんを落とした。それを空かさず、飼い犬のレックスが鼻先で探る。

「くう……ん？」

その便せんのある一文とはこうだった。

『12月24日　家に帰ってくる

父より』

恐怖のエアメール（後書き）

ご意見、ご感想などお待ちしております。
では、第二話へ。

弟と仲違い（前書き）

えー、ここで注意書きです。

この話では、海雅は実家に住み着いているという設定です。その点だけに留めて置いてください。

弟と仲違い

とある駅。そこに一人の男が降り立った。

長身でがっしりした体格。色黒でワイルドな顔つき。ちなみに、サングラスを掛けていた。

「ひゃくくああ！ 帰ってきたあ！」

男は荷物を放り出し、その場の空気を味わうように、一際大きく深呼吸する。

「良いねえ、この空気……。俺のふるさと・海津の空気だ……」

深呼吸したままのけぞり、冬空を仰いで感慨にふける。

「懐かしい……。すげえ、懐かしい……」

気付けば、彼の眼から一筋の涙が頬を伝っていた。

「……。兄貴達、元氣にしてっかなあ！」

姿勢を元に戻ししばしの沈黙の後、手を腰に置き仁王立ちする。

「……。風画！ 海雅！ 親父、母さん！ レックス！ 三男・競賀。只今帰りましたあ！」

彼、白狼競賀は、懐かしの我が家に向けて走り出した。

「あ！」

競賀は何かを思いだして立ち止まる。

「荷物忘れた……」

そう言つと、彼は道ばたに放り投げた荷物を拾い集め、再び走り出した。

「ヒヤホーイ。待つてろよオ！」

競賀が駅に着く相当前。エメールを読んだ二人は、リビングにあるテーブルで向かい合わせに座っていた。二人ともテーブルに突っ伏し、頭を抱え、歯をガチガチさせて、薬物中毒者の様にげっそりとしていた。

「ヤバイ……。まさか親父が来るなんて……」

海雅は恐れに恐れ、まるで迷子の仔ウサギの様に怯えていた。

「どうしよう……。俺、今日部活がないから、美奈とデートする約束なんだ……」

風画からいつもの元気は消え失せ、朝からすっかり憔悴していた。
「イブのデート！ うらやま……いや、ダメだ、絶対断れ！」

「出来るか！ イブのデートだぞ！ それに来年は受験があるし、今年しかできないだろ！」

風画はテーブルを強く叩き、立ち上がって怒鳴り散らす。しかし、そんな風画を海雅が制した。

「馬鹿野郎！」

海雅は立ち上がり様に、風画の眉間にストレートを放つ。

「あべしっ！」

某アクションマンガの様なリアクションをとり、風画は椅子を巻き込んで倒れた。

「親父が来るのに『デート』だあ！？ ふざけんな！ んなことしてみろ、親父に殺されるぞ！」

「で、でもよう……」

「うるせえ！ 死にたいのか！」

額をさすりながら反論する風画を見下ろして、海雅は言う。

「今日家に居ないと、親父に殺されるんだ。でも、デートを断つても、嫌われるが殺されはしない！ 親父に殺されるのと、ええと、美奈ちゃんに嫌われる、どっちかだ！」

「うっ、死にたくないが、美奈に嫌われたくもない……」

床をグーで叩きながら、マンガの様な泣き方をする。

そんな風画の肩に、海雅がそつと手を置いた。

「いずれにせよタダでは済まないさ。死ぬときや一緒だ！ 風画！」
「兄貴イイ！」

その場で熱い抱擁を交わす二人。寒空の元、二人だけが異様に暑苦しかった。

そのおり、風画の携帯が鳴った。

「……………」

「もしもし……………」

電話に対応する風画と、それを見守る海雅。

『もしもし。風画くん?』

電話の相手は、美奈だった。

「や、やあ、美奈。どうかしたの?」

必死に冷静さを装うが、声はかなりうわずっていた。

『風画くんこそどうかしたの? なんかいつもと違うけど?』

「う、うん、実はね……………」

風画は海雅を見た。海雅は風画と眼を合わせ、一回だけうなずく。

「……………」。美奈。ゴメン。今日のデート、行けません!」

電話口で土下座し、精一杯声を張り上げ謝罪する。

『……………』

「……………」

しばしの沈黙。

『大っきライ!』

直後、電話の切れる音。

「ゴメン……………」、ゴメン……………」

風画はうわごとの様に繰り返す。そんな風画の前に、悠然と立つ

海雅。

「風画。世界の半分は女だ! めげるな!」

「兄貴イイイ!」

再び暑苦しい二人。そんな二人の一部始終を、レックスはしかと

見届けていた。

「くうくん……………」

レックスが日本語を喋れたら、『可哀想に』と嘆いていた事である。

弟と仲違い（後書き）

キャラ紹介します。

はくろうきやうが

白狼競賀 男 身長：180センチ 体重：80キロ

IQ200以上の天才。早い時期に親戚の養子になるが、小学校入学時に天才児と判明し、それからは世界各国の大学を渡り歩く生活を送っている。海雅、風画の弟で、白狼家の三男であり末っ子。風画の一つ下。正確は、この兄弟の血統なのか、相当な快活である。

ヤクザ屋さんとブラックコーヒー

風画が美奈とのデートを断った丁度その頃、競賀は駅前の喫茶店でカフェオレを啜っていた。

（まあ、焦ってもオレの実家は無くならないし、しばらくふるさとの空気を堪能しますか）

競賀はそう思いつつ、店に備え付けのファッション雑誌に目を通す。

そのおり、喫茶店に新たな客が現れた。

「いらつしゃいませ」。お客様何名様ですか？」

直ぐさま店員が駆け寄って、客に訊ねる。すると、その客はやたらと低く洪みに満ちあふれた声で、『一人だが、あとでもう一人来る』と言った。

（待ち合わせか？）

その会話を遠巻きに聞き取っていた競賀はそんな事を思いつつ、新参の客を横目で視認する。

客は男だった。身長は一八〇後半でオールバック。質の良いトレンチコートを羽織り、重厚な輝きを放つサングラスを掛けていた。

（ヤクザか？ いや、あの貫禄からして暴力団っぽいな。しかしまあ、物騒な世の中だなあ……）

自分のふるさとに出没した異質な男に対し、言いしれぬ不安感と治安の悪化を嘆く。そして、その不安を飲み込むようにして、彼はカフェオレに口をつけた。

（っておい。向かいの席かよ！）

その男は窓際のテーブル席に座った。それは競賀の席と向かいの席でもあり、更に競賀はその男と向き合う形となる。

店員からメニューを受け取ると、直ぐさま『ブルーマウンテンのブラック』とオーダーし、店員にメニューを返す。

そのおり、男と競賀の目があった（様に見えた）。相手がサング

ラスを掛けていたので目が合ったかどうかは不明だが、それでもサングラス越しの眼光は鋭く感じれた。

男は凍り付く競賀を尻目に、いそいそとコートを脱ぐ。すると、男はダークスーツを着ていた。

（おいおい、完全にそっち方面の人じゃん！ それに、『待ち合わせ』じゃなくて『取り引き』だろ！）

完全にビビる競賀。そのおり、男の元にコーヒーが届いた。男は店員に一礼すると、スーツのポケットから携帯を取り出し、誰かに電話を掛けた。

「私だ。もう来ている。……。わかった、ゆっくりで良い」

男は電話を切り、コーヒーを一口啜る。

（怖い、恐い、コワイ！）

自分がIQ二〇〇以上の存在であることを忘れ、もはや生まれたての子鹿の様に震える。自分を落ち着けるためにカフェオレを飲むとすが、手が震え空中でカフェオレをこぼす。

そのおり、男が立ち上がった。一切無駄が無く、その上貫禄のある動き。その一挙手一投足に、競賀は更なる威圧感を感じる。

（トイレに行ってください、トイレに行ってください。トイレに行ってください！）

必死に心の中で懇願し、なるべく見ないようにうつむく。競賀の中は恐怖で一杯になり、瞬きすることすら忘れる。そのせいか、競賀の瞳がしばしばしてきたが、それに気付く程の余裕は彼に無かった。

その時。

「君、人違いだったら済まないが……」

やたら低くて重厚感のある声。

競賀の恐怖はピークに達した。

（ひiiiiiiiiっ！ 違います、違います、間違いない人違いです。白い粉なんて、持ってません！ でも、貴方はわるくないです。ごごご。ゴメンなさいiiiiiiiiiiiiiiii！）

競賀が泣き出す寸前、男は競賀にとって一番意外な言葉を発した。
「君は、白狼風画の弟の……競賀とかいったかな？」

十数分後。喫茶店に髪の毛の長い女性が現れた。艶やかな黒髪を背中まで伸ばし、上品なフアーのコートを羽織っている。

「槍クーン。ゴメンね、何着てくか迷っちゃって」

店員が声を掛けるよりも早く、その女性は声を張り上げる。

「おう、沙輝。まあ、細かいことだ、気にするな」

男はそう言っ、女性の方を向いて右手を掲げる。

「それじゃあ、槍牙さんは副キャプテンなんですね？」

男に質問したのは、他でもない競賀だった。

「ああ、そうだ。いつも君の兄には世話になってる」

「いやいや、不出来な兄です。いつもむちゃくちゃな事言ってるでしよ」

「まあ、『映画を作ろう』と言われたときには、少し驚いたがな。しかし、あれは風画らしくて良かった。実際、私も楽しませて貰った」

ほのぼのと談笑する競賀と槍牙。同じテーブルで向かい合って座り、身の上話に花を咲かせる。

「ねえ槍クン。この人誰？」

テーブルに近付いた沙輝が、槍牙にそう訊いた。

「ああ、風画の弟の競賀というやつだ。十年ぶりくらいに風画に合いにきたらしい。いやはやしかし、なかなか話が合う」

完結に説明を終えると、槍牙はコーヒーを啜る。

「ふーん。あ、ワタシは滝川沙輝って言います」

「えーと、先程ご紹介に預かりました白狼競賀です。よろしく願います」

「ところで、君は風画の家にいなくて良いのか？」

「あ、そうですね。じゃあ、これから行きます。じゃあ、槍牙さん。後でメール下さいね」

競賀はそう言っ
て荷物を抱えて
テーブルを立ち、
店を後にした。
競賀が去ってか
ら数秒経ってから、
沙輝が槍牙の向
かいに座る。

「なんか似てた
ね、風画クンに」

「そうだな、少
し似ていた。人
に金を払わせる
所が特にな……」

槍牙はそう言っ
て、卓上の細長
い紙に目をやる。
その紙には『力
フェオレ 五〇〇
円』と明記され
ていた。

「しかし……、
あまり高い物を
頼まない辺りが
違うな」

槍牙はそう言っ
て、残りのコー
ヒーを飲み干し
た。

喫茶店を出てか
ら数分後。競賀
は新たな忘れ物
に気付き、一旦立
ち止まる。

「あ！ 金払うの
忘れた。ま、良
いか」

競賀はそう言っ
と、寒空の下を
歩き出した。

ヤクザ屋さんとブラックコーヒー（後書き）

「映画を作ろう」が気になった方は、私の小説「シネマ七日間地獄」の閲覧をおすすめします（^- - ^）

七福の馬刺をおごらせろ！！

競賀は喫茶店を後にし、そのまましばらく歩き続けた。海津駅周辺はクリスマススムード一色で、軒を連ねる商店はイルミネーションを施し、駅前の広場には五メートルはあるクリスマスツリーが立っていた。

「いいねえ、クリスマスだねえ。しかし、俺はこんな聖夜をむさ苦しい男共と過ごすのかあ……」

遠い目で呆けた面をし、のたのたとした足取りでキャスター付きのトランクを引きずる。

彼はクリスマスツリーの正面まで来た。一度ツリー全体を睥睨してから、辺りを見回す。そこら中にカップルの姿が見え、どれもこれもいちゃいちゃしている。

「はあゝあ。他に行くとこねえのかよ……。まあ、いいか」

競賀は踵を返し、自宅へ向かおうと歩き出す。すると、彼の耳に聞き慣れた男の名前が聞こえた。

「風画……クン……！？」

「ん？」

競賀は自分の兄の名が聞こえたことに驚き、声のした方を向く。

そこには両目の下に涙の跡のある、沈んだ表情の女性が立っていた。もしかして……、美奈姉ちゃん……？」

競賀はサングラスを外して美奈の顔をよく見る。美奈の整った顔立ちの中に、くっきりと残る涙の跡。

「風画クンじゃ……ないの？」

美奈は競賀に近寄る。

「ああ。風画は俺の兄貴で、俺は競賀。幼稚園の時くらいに養子になったんだけど、覚えてる？」

「風画クンの弟の競賀クン……。あつ！思い出した！」

美奈の表情がパツと明るくなり、いつもの明るい美奈に戻る。

「覚えてくれてたの？ いやあ、良かった。しばらく海外にいてさ、今日の朝早く、日本に帰ってきたんだ。んにしても懐かしいなあ」
「ワタシも！ もう、十年くらいぶりだね」

「そうだねえ。兄貴は元気にしてる？」

競賀がそう訊いたとき、美奈の表情が一度よどんだ。競賀はそれを見逃さなかった。

「どうしたの？」

競賀にしてみれば、明るいイメージの強い美奈がこんな表情をすることは予想外であった。登場したときから残る涙の跡も気になる。

「うん。風画クンにね、今日のデート断られちゃった……。ずっと、楽しみにしてたのに……」

美奈は俯き様に泣き出した。

「今日……、二人とも部活無くて……、一日中一緒に居られると思っただのに……。『おはよう』って言おうとして電話したら、いきなり『来れない』って……」

美奈の涙の跡の理由が分かった。自分の兄は、彼女とのデートを断ったのだ。そう思うと、自分の中で無性に怒りがこみ上げてくる。

競賀は険しい表情を浮かべ、そつと美奈の方に手を置いた。

「美奈姉ちゃん……。安心して。あんな馬鹿兄貴は、俺が思いつきりぶっ飛ばしてヤルよ」

「競賀クン……」

競賀は自分の前で拳を作り、それで自分の胸板を叩く。

「ありがと……」

涙を堪え、俯いたまま謝意を述べる。

「競賀クン。風画クンに合ったらこう伝えて」

「何？」

「お正月に『七福』の馬刺おごって、って」

七福とは、この辺では名の知れた居酒屋である。ここの馬刺は結構旨いが、その分値が張る。馬刺に目の無い美奈にとって、七福の馬刺は高級品なのだ。

「うん……、分かった……」

七福は比較的新しく出来た居酒屋なので、競賀は当然の事ながら知らない。しかし、頼みとあつては断れず、『七福って何?』と訊くのも野暮だったので、競賀は当惑しつつも了承した。

(まあ、店に詳しい兄貴の事だから、言えば分かるだろう)
というのが、競賀の心情だった。

七福の馬刺をおごらせる!! (後書き)

馬刺ねえ、私も結構好きです。まあ、それを出す店は知りませんが
(^| ^ ;

フィッシャーマンズスープレックスホールド

まさか、自分の尊敬していた兄が、こんなにも無責任でどうしようもない男だとは思わなかった。彼女とのデート（イブ）をドタキヤンの上、あまつさえ二度も泣かしたのである。

自宅へ向かう一人の男の中では、地獄の炎よりも熱くたぎる闘志が燃えていた。

風画の自宅のリビングにて、風画と海雅は父親来襲に備え、入念かつ丹念な予行を行っていた。

「良いか。親父が包丁を振りかざしたら、お前が止めにかかれ」

海雅はカルチャースクールの講師のように説明する。

「兄貴は？」

風画からの質問。

「俺？ 俺は警察に連絡」

海雅はそう言って、携帯を指差してひょうきんに言ってみせる。

風画が怪訝顔をしているのを知ってか知らずか、海雅は次の行動パターンについての説明を始めた。

「よし。次は親父が釘バットを取り出した場合だ」

どこからともなく取り出したクリップボードに目をやり、ボールペンを片手にすらすらと説明する。

「風画はそれをグローブで受け止め、俺は……」

「警察」

「当たり前」

「弟が可愛くないのかてめえ……」

「いいや、弟は大事さ。だから、大事になる前に警察を呼ぶのさ」
新人の漫才よりかは流暢なやり取り。

その時だった。

「クソ兄貴iiiiiiii!!」

玄関のドアを乱暴にぶつ飛ばし、ほぼ全開状態の競賀が家に入ってきた。

「くたばれやあー!!」

リビングに押し入るなり、海雅の背中にドロップキックをぶちかます。

「ぐぼお!!」

蹴りの衝撃をまともにくらい、前のめりに倒れながら吹っ飛ぶ。その見事たるや、プロレスの試合さながらだった。

「あ、競賀じゃん。久しぶり」

吹き飛ばされた海雅から少し離れていた所にいた風画は、競賀に向けて軽く手を振る。

しかし、競賀は風画の存在に気付かず、目の前の海雅を風画だと思いいこみ、呵責無き暴力の応酬を繰り返していた。

「何故、断ったアアア!!」

逆エビ固め。

「痛い! 痛い!!」

苦痛に喘ぐ海雅。

「女を泣かしやがって!!」

サソリ固め。

「止めろオオ!!」

床を平手で叩き、苦悶の表情を浮かべる。

「とどめだ!!」

最後は、最もポピュラーな技。四の字固め。

「ワン。ツー。スリー」

風画は顔を床に近づけ、カウントを取った。海雅動かず、勝敗は決した。

「ウイナー。白狼競賀あああー!!」

カウントを取り終えるやいなや、風画は競賀の右腕を掴み、高々と掲げる。

その時だった。

「はっ！！」

競賀と風画の目が合う。

「よ、競賀。久しぶりの帰宅にしては飛ばしすぎだぜ。もうちょい穏やかに現れな」

言い終わると共に、指をパチンとならしてみろ。すると、競賀の闘争本能が再び燃え上がった。

「貴様、よくもぬけぬけとお！！」

風画の手首を即座に捻り、そのまま床に叩き付ける。

「！！！！」

突然の一発に言葉を失う。

「見損なつたぞ！ コラア！！」

競賀は一旦風画と距離を置き、姿勢を正した風画に向けて延髄斬りをかます。

「うおっ！」

風画は数メートルよろける。体勢を崩した風画は、左膝を床につけてしまった。

競賀はそれを見逃さなかった。

「もらつたあ！！」

競賀は風画に向かって走り込み、左足で風画の右足に飛び乗り、右足で横から薙ぎ払うように膝蹴りを見舞った。その膝蹴りは、風画の後頭部を気持ちよく直撃した。

競賀の一撃をもろに食らった風画は、床に顔を擦りつけながら倒れた。

「出た！ シャイニングウィザード！！」

いつの間にか回復していた海雅は、二人の激闘の様子を目の当たりにして、感嘆の声を漏らす。

「さあ、風画選手。ギブか、ギブか！？」

海雅は風画に駆け寄り、顔と顔とを肉迫させて荒い語気で問いつめる。その際、競賀は二人を見下ろす形で仁王立ちしていたが、そこで初めて標的を間違えた事に気付いた。

「あれ……？　おかしいな……？」
その時。

「ちくしょ~~~~。つぎやがって、この野郎……」
後頭部に残る痛みを振り切って、風画は悠然と立ち上がった。

「この馬鹿競賀！！　藤波辰爾の大技でも食らえ！！」
風画はいつぞやの海水浴場での一場面の様に競賀を持ち上げ、そして。

「うおおー！！」

後方へブリッジしながらフォール。風画お得意の大技は見事に決まり、競賀のヒットポイントをみるみるゼロにした。

「決まった！！　フィッシャーマンスープレックスホールドオオオー！！」

実況みたいに熱く騒ぎ立てる海雅。

「流石、藤波辰爾選手ですね。彼は強いです」

今度は、解説の様にクールにコメント。どうやら、一人二役らしい。

固まったまま動かない競賀を放り出し、風画は高らかにウィナーコール。

「藤波たつ~~~~みい~~~~！！！！」

彼らはつくづく暴れるのが好きなようである。血気盛んで芸達者な三兄弟であった。

フィッシャーマンズスープレックスホールド（後書き）

えー、今回のプロレス技に関する描写について、その方面に詳しい方が見て「なんか違うな」と思われちゃったら、なんなりとご意見を下さい。自分自身、かなり自信が無いので……

弟武勇伝

フィッシャーマンズスープレックスホールを喰らった競賀は、しばらくの間失神し、目が覚めたのは夕方だった。リビングの三人がけのソファで寝ていた競賀は、向かい合った一人用のソファに座ってテレビを観ていた海雅が最初に目に入った。

「あ、海雅兄貴。おひさ〜」

目覚めと共に陽気に話しかける。

「るうせえ。この乱暴モンが」

ふてくされて頬杖をつき、リモコンをいじくる。

「そついやさ。風画兄貴は？」

上半身を起こし後頭部をさする。あの一撃は、相当重かった様だ。その前に、言うことがあるだろが」

テーブルに置いたコーラを啜り、海雅がぼつりと言った。

競賀はテレビの脇にある、綺麗に飾り付けられたクリスマスツリーに目をやり、

「ああ。メリークリスマス」

「こいつ……」

海雅は競賀を横目で睨み付け、にわかな怒りを覚えた。

風画は買い物から帰ってきた。今日はクリスマス、それも、一家全員が一堂に会するのである。風画は久々の一家集合をもてなすべく、近所のスーパーへ買い物に行っていたのである。

「ただいま」

両手に大きなビニール袋を持った風画は、帰宅すると直ぐさまキッチンに向かう。その時、リビングで腕十字をくらい悶える競賀を見た。

（またやってる……）

二人のやり取りに呆れながらも、風画は夕飯の支度を始めた。

「風画。今日のメシは何だ？」

競賀を更に締めながら、海雅が言った。

「んーとね。フライドチキンと、シーフードスパゲティと、あとは、まあ、適当に……」

風画はいそいそとフライパンやら鍋やらを取り出し、それをコン口に乗せ調理を始めた。

「はっはっはっはっは！」

「わっはっはっはっは！」

「がっはっはっはっは！」

三人の男達が、食卓を囲んで高らかに笑う。どうやら、思い出話やこれまでの出来事について盛り上がっているようである。

「俺はよ、何度も言ってるように、いろんな所を旅行してんの。真冬の日本海とか」

海雅はフライドチキンをかじりながら言う。

「後は、特にねえな」

「ふーん。競賀は？」

風画はキッチンから追加のチキンを持ち、空の皿を下げながら訊いた。

「俺はさ、小学校行く前に天才児だって事が分かってさ、それから世界中の大学を回ってたのさ」

スパゲティをフォークに巻き付け、涼しい顔で言う。

「へえー。どこの大学に行ってた？」

海雅が訊いた。

「んーとね、七つの時に北京大学に行っただけど、そこは食い物がまずいので六ヶ月で辞めてしまった」

「次は？」

「次は、オーストラリアのシドニーだ。向こうは歓迎ムード満天でさ、ちょちょいっと論文書いたらもう喜んじやって、喜んじやって『お礼にアボリジニのダンスをお見せします』って言われたんだけ

ど、正直興味がないのでコアラと写真を撮って、すぐに次の大学へ向かった」

ノナルコールのシャンパンをくいっと一気飲みし、ふうっと一息つく。

「それで、次はケンブリッジ大学。でも、あそこは駄目だね。何てったって俺の行った学部にはオタクが多くて……。もうホント息苦しかった。それが、十歳の時だったかなあ？」

こめかみあたりをぼりぼり掻く。

「それで、その次はオックスフォード。あそこは、特に普通だ。普通すぎてつまらなかったんで、三ヶ月で脱走したみたいに次へ行った。その時、他の大学のオファーが凄くてさ」

さらりと自慢話をしてみるが、他の二人は気にすることなく話の続きを待っていた。

「へえ、そこで次は？」

「ああ、次はハーバードだ。あそこはね、これまでで一番マシだったね……。普通って訳でもなく、変すぎて訳でも……。なく。とにかく楽しかった……。うん」

こみ上げる記憶を飲み込むようにして、いままで咀嚼していたスパゲティを飲み込む。

「んでよ」

テーブルに両肘をつき、二人を交互に見渡して言う。風画はチキンの軟骨をセコクコリコリさせ、海雅はスパゲティのアサリの貝柱をけちくさくほじくっていた。

「きいてないか。ま、いいや……」

「そっいえばよ」

風画は食べ尽くした鳥の骨を背後に放った。その骨は、見事ゴミ箱に吸い込まれた。

「お前、いつ帰ってきた。連絡もよこさないで」

風画は少し尋問口調だった。どうやら、延髄斬りとシャイニングウィザードが影響しているようである。

「ああ、今日の朝一の飛行機で日本に来てさ、そこから始発でここまで来た。すいてたから、座席占領して寝れた」

そこで、競賀は何かを思いだした。

「そうだ。美奈姉ちゃんが『七福の馬刺おごつて』っていった。なんかさ、デートすっぽかした罰らしいよ」

「ええ！　よりによって『七福』かよ。あの悪女め……」

風画は「七福」の名げ出るなり、テーブルに突っ伏してうなる。どうやら、風画にとって『七福』という居酒屋は、かなりの強敵らしい。

ぐじぐじばやく風画に、競賀が更に続けた。

「ついかさ、何でデート断ったんだよ。美奈姉ちゃん……、泣いてたぞ……」

『泣いてた』。その一言で、風画は顔を上げた。そして、慎重に言葉を選んでから、重々しく告げた。

「競賀。よく聞け。確かに、俺は美奈とのデートをドタキャンした。そして、あまつさえ泣かしてしまった。これは許されることじゃない。しかし、そうせざるを得ない、重大な理由があるんだ」

競賀は風画の真剣な表情を読みとり、黙って頷く。海雅は二人のやり取りを、固唾を吞んで見守る。

「お前が俺を見損なっても良い。女々しいヤツだと思っても構わない。しかし、これは、お前の生命にも関わる問題だ」

競賀は唾を飲み込んだ。

「親父が……、帰ってくる」

その言葉の後の数分間、白狼家は不気味な静寂に包まれた。

弟武勇伝（後書き）

今回の話にある、大学やその周辺に関する記述は、全くの大嘘です。
関係者の方、すみませんでした m (——) m

白狼宗駕

東京上空六〇〇メートルを、一機のヘリコプターが夕日に染まっ
て飛ぶ。その機内には、若いパイロットと壮年の男性がいた。

「間もなく、着陸地点です。向こうに見える山ですね」

パイロットは前方に見える、他の山々より一段飛び出した山を指
差し、同乗の男にそう告げる。すると、その男は座席から身を乗り
出し、

「山中！？　ばか。息子たちが待つてるんだ。オレの家の庭に降ろ
せ」

男はそう言つて、人差し指を下に向けた。

「そんな。むちゃ言わないで下さい。決まった所にしか降りられな
いんです」

パイロットは困り果てるも、『決まりですから』と男に告げる。

男は観念し、座席に座り直した。

「そっか、決まりなら仕方ないね……」

心なしか、その声には元気が無かった。

しょんぼりとして、機内の床に視線を這わせる。

「五年ぶりでしたよね？　息子さんたち喜ぶますよ。きっと。私に
もね、3ヶ月の息子がいまして、それが可愛くて」

「おお！　なら話は早い。息子の可愛いさが分かる者同士、ここは
手を取り合つて、オレをオレの家の庭に……」

男が言い切る前に、パイロットはピシヤリと制した。

「だから無理なんですよ。決まりは決まりですから」

「そこを一つ。ね！？　こんど、銀座でスシでも！？」

「何と言われようと、出来ないものは出来ないんです！」

パイロットのご機嫌を取ろうとしたが、それは上手く行かず、結
局、自宅の庭には降ろしてくれそうになかった。

白狼家から笑いが消え、不気味な静寂が訪れてから数分、競賀が口火を切った。

「ウソつくなよ……、風画兄貴……」

顔中に汗を垂らし、引きつった笑みを浮かべて訊く。その笑みには『信じたくない』というニュアンスが含まれていた。しかし、風画は首を横に振った。

「ウソなんかじゃない。本当だ」

競賀は風画の顔と対峙する。それと同時に、競賀の論理的思考回路が働き出した。

『風画の顔は真剣そのもの。額から脂汗を流し、険しい顔つきで、こちらを見ている。では、海雅はどうか。海雅は風画と違い、いつもいい加減で適当だ。もし、海雅がへらへらしていたら、これはドツキリの類である』

競賀はコンマ数秒でその論理を構築し、論理の答えを得る為に、海雅の顔を見た。

海雅もまた、風画と似たような顔つきをしていた。

競賀の論理の答えは出た。

『風画の言葉は紛れもない事実。即ち、今日中に親父が帰ってくる』と。

その時だった。

「わん！ わん！ わん！」

庭から飼い犬のレックスの鳴き声が聞こえた。いつもと違った強い鳴き声。そして、尻尾をピンと立てている。これは『警戒』のサインである。

レックスの異変に誰よりも早く気付いた風画は、ガラス戸を開けて裸足で庭に降り、駆け足でレックスに近づいた。

「どうした！？」

片膝立てでレックスの頭を撫でる。

「わんわん！」

レックスは空に向かって吼え続ける。

「？」

風画は空を見上げた。そのおり、海雅と競賀が玄関の方向からやって来る。

「どうした？ 二人とも空なんか見上げちゃって。宇宙人の侵略か？」

海雅も空を見上げ、隣にいた競賀もそれに倣う。

澄んだ夜空に眩い月光と散りばめられた星。そんな夜空の一部分が、小さくぼつかりと切り取られていた。

「わん！ わん！」

レックスは更に吼える。

そんな中、地上にいる彼等を上から風が吹き付け、けたたましいローター音が響き渡る。

「ヘリ？」

競賀がポツリとこぼす。

その時だった。

『いよあーうー！！ みんな元気かあ？』

ローター音をかき消さんばかりの大声。それが拡声器によって作り出された物と認識するまで、さほど時間は掛からなかった。

『待つてろよ！ オレはすぐ行くぞー！！』

ヘリから身を乗り出し、右手の拡声器越しに声を張り上げる。

地上の三人と一頭は、その光景を啞然として見ていた。

「白狼さん！ 危ないから戻って下さい！」

機内からパイロットの声が漏れる。

『うるさい！ あんたが聞き分けないから、オレは一人で降りる』

拡声器の男は、パイロットに拡声器を向けて言う。

「聞き分けないのはアンタでしょーがあー！」

パイロットが耳鳴りの中叫んだ直後、男は拡声器を機内に放り、変わりにスーツケースとボストンバッグを抱えて、再び身を乗り出す。

「とぉー！ー！」

地上五メートルから男が飛び降りた。

男はみるみる降下し、地上でぽかんとしている風画に迫る。

「うわわわわわ！」

「風画！ 逃げる！」

「兄貴！ かわせ！」

「わんわん！」

「ただいまー！」

四人と一頭が叫ぶのは、殆ど同時だった。

男は風画に馬乗りになる形で着陸した。

「なあ、海雅兄貴」

競賀は海雅に言いたい事があった。

「何？」

海雅は風画と男に釘付けになりながらも、競賀の声に応える。

「宇宙人より厄介なのが来たね」

「そうだな。ついでに、ノストラダムスの予言は六年と五ヶ月遅れ
みたいだな」

「俺は予言なんて信じないね、非科学的だ」

「じゃあ、今日この瞬間から信じろ」

へりは闇夜に向かって飛び立ち、辺りに静けさが戻る。そんな中、
先ほどまで吼えていたレックスは、尻尾を振って跳ね回っていた。

「わんわん！」

「久しぶり」

仰向けの風画の上で、彼等の父親は陽気に手を振った。

「ヒヤッホオーイー！^{はくろしゅつが} 帰って来たぜい！」

彼等の父親、白狼宗鷲は、荷物を放り出して叫んだ。

白狼宗駕（後書き）

はくろうしゅうが
白狼宗駕 身長：一八八センチ 体重：八一キロ とある大企業の重役で、毎日のように海外を飛び回っている。そのため、家に帰ってくる事は稀。白狼三兄弟から恐れられているが、その理由は後ほど……………。

ショットガン

白狼宗駕が家に来てから、白狼家は重苦しい空気に包まれた。別に、宗駕氏が兄弟を叱ったりした訳ではない。三兄弟が父の存在にビビりまくり、貝の様に口をつぐんでしまったからである。

それを宗駕氏は分かっている筈だが、彼はそれを無視して食事に勤しんでいた。

「うん、このトリは旨いね。全部風画が作ったって？ いやー、母さんに似て料理が上手いなお前は」

宗駕氏はそう言っ、て、風画の頭をぺしぺしと叩く。

ちなみに、現段階でのテーブルを取り囲む状況はこうだ。まず、三人がけのソファに宗駕氏が座り、向かいの三人がけに三兄弟が座る、といった感じである。しかし、その状況たるや、まるで先生が生徒に説教をしている様だった。実際、そこまでギスギスした関係ではないが、とにかく、三兄弟が宗駕氏にビビっているのである。

「うん、このスパも旨い！ アサリが良いね。前にギリシャで喰ったのと同じくらい旨いよ」

大皿を抱え、取り分け用のかいフォークで豪快に掻き込む。

「そんでさ……。競賀は今日帰って来たって？」

「は、はいっ！ そうです」

一瞬縮み上がり、やたらと引きつった返事をする。

そんな競賀に、宗駕氏はこう告げた。

「そう固くなるなって！？ オレたちや『ファミリー』だろ！？ かしこまっても楽しくないだろ！？ さあ、みんな喰え！ 若い力だ、沢山喰え！！」

両腕を大きく開き、開けっぴろげな態度で食事を勧める。しかし、三兄弟の答えは『否』だった。

「結構です……」

「食欲がありません……」

「ダイエット中です……」

歳の若い順からそう答えた。しかも、全員俯き加減で、手を胴体に密着させ、足も閉じきっている。

「あ、そう？ 要らないなら、オレが全部食べよう、もったいないからな」

その時だった。

ピンポン。と、玄関のチャイムが鳴った。

「オレが行こう。みんなは食事を楽しみ、愉快に！」

宗駕氏はそう言っただけで席を立った。

しばらくして、宗駕氏が戻ってくると、彼はどでかい段ボール箱を大事そうに抱えてやってきた。

「よいしょお」

箱を床に置く。

「？」

三兄弟は床の箱に見入り、一斉にはてなマークを浮かべる。

「ふふん。気になるか？ しかし、これはお楽しみだ。さて、クリスマスパーティの続きをしよう」

宗駕氏はソファに座り直し、シーザーサラダに手を伸ばした。

「そうそう。世界中のお土産を見せてあげよう」

フォークを持つ手を一旦休め、ソファの隣に置いてあるボストンバッグを開ける。

しばらくバッグを探ると、手で掴んだ物を確認し、一度三兄弟を睥睨する。その時、彼は微かに笑っていた。

「？」

笑みの意味が分からず、啞然とする三兄弟。

僅かに間を置いてから、宗駕氏は高らかに言った。

「じゃじゃーん！ メキシコ産テキーラ！！ アルコール分五〇パーセント！！ ん、よいしょお！！」

「！！！？？」

三兄弟絶句。何故なら、宗駕氏はテキーラの栓をおもむろに開け

ると、迷うことなくラッパ飲みしたのだ。テキーラを知らない方の為に説明するが、テキーラはとてもキツイ蒸留酒である。

「ぶはー、うめえ！！ さあさあさあ！ 次はコレだー！！」

宗鷲氏は空になったビンを放ると、バッグから次のビンを取り出す。そして、これも迷うことなくイッキ飲み。

「ああー、ウオツカうめえ！！」

ビンのラベルをしげしげと見詰める宗鷲氏。

『ウオツカ！！？？』

ウオツカとは、言わずと知れたロシアの蒸留酒である。アルコール度数がべらぼうに高く、臭いだけでもキツイ。ロシア人達はそれに唐辛子の粉を混ぜ、「気付け薬」と言って飲むのである。また、ロシアの一部地域で催される「ウオツカ早飲み大会」では、毎年救急車が出動し、死者まで出る始末である。

「はっはあ！ テンション上がったぞ！」

その後も、宗鷲氏はバッグから取り出した酒類を矢継ぎ早に飲み干し続け、いつの間にか、空き瓶の山が築かれていた。その空き瓶たるや錚々たる物だった。先述のテキーラ、ウオツカを始め、ラムリキュール、ブランデー、ウイスキー、ジン、泡盛、パイカル、エトセトラ、エトセトラ……。そこには、世界中のありとあらゆる火酒の空き瓶が転がっていた。

「あー、酒旨い……。飲み過ぎだなこりゃ……。明日からまたロスに飛ぶのに……」

ソファの背もたれに思いきり身を預け、天井に顔を向け額に手をあて、瞑目してぼやく。

「あー、いつもやつちまうんだよな、コレ……。家に帰ると直ぐさまイッキ……。体壊すの時間の問題だねコレ……」

既に過ぎた己の過ちを悔いる。

「そっぴやさ、お前等なんか喋れ……。ずっとだんまりじゃねえか……。せつかく帰ってきたのに面白くない……。なあ、風画……」

名指しされた風画は、自分に人差し指を向けてキョロキョロする。

すると、風画と目のあつた海雅と競賀は、ほぼ同時に風画の肩に手を乗せた。

「じ、じゃあ……、げ、元気？」

口籠もり、噛みながら言った。

「ああ、元気さ。ついでに酒呑んだから、もつと元気だ」

上着を脱ぎ捨て、ネクタイを緩めつつ言った。

「へえ、そりや良かった……」

次の言葉が見当たらず、苦笑いの表情を浮かべたまま固まる。

「おい。会話になってないぞ!？」

「ご、ゴメン！ いや、でも、久しぶりだしさ。ホラ、つもる話は何とやらって言うじゃん」

宗駕氏を怒らせたと思い、必死に弁解する。

「これじゃあちが明かないなあ。良し、じゃあちよいと神罰を下してやるう」

宗駕氏はすつくと立ち上がり、例の段ボール箱を開けた。

段ボール箱は一〇〇×一〇〇×一〇〇の特大サイズで、外面には何も描かれていなかった。

「えーと、これには用が無いんだよな……」

箱を開けた宗駕氏は、一番最初に出会った妙な形状と模様のお面を無造作に放り投げる。

「なんだこれ……。どこのお面だ？」

放られたお面をキャッチした海雅。すると、競賀が顔を覗かせる。

「これは多分……。ポリネシアのお面かな」

「ポリネシア？　なんだそれ。ポリエチレンの親戚か。確かにこれは薄っぺらく出来てるけど……」

「違うよ、ポリネシアは太平洋上の島の総称だって」

海雅のボケなのか天然なのか分からないコメントに対し、冷静に突っ込む競賀。そんな中、風画が震駭した。

「親父！　何を持ってきたんだよ!!」

腰を抜かして宗駕氏を指差す。その時、風画は目を大きく見開き、

完全に怯えていた。

「んん？ これはなアメリカ直輸入のショットガンだ……」

宗駕氏の手には、全長六〇センチほどの黒光りする金属製のパイプらしき物が握られていた。直後、酒に酔い冷静さを欠いた宗駕氏は、ショットガンのポンプを引いた。

ジャキン。

重厚な金属の噛み合う音が響く。

かくして、壮絶なる聖夜は幕を開けた。

戦争ワッショイ！

宗駕氏がショットガンを取り出してから十三秒後。最初の一発が放たれた。初弾は風画の右頬をかすめ、テーブルの上の霞草で飾られたガラスの花瓶を、一瞬のうちに吹き飛ばした。

『！！！！！！』

銃声の直後、ガラスが割れる音と水が弾ける音。その後ガラスの破片がテーブルに落ち、テーブルを伝う水が床に垂れる。

何が起こったか分からず、啞然として棒立ちする風画。海雅・競賀は座ったまま呆然とする。そんな三兄弟に非常事態を告げたのは、鼻腔をくすぐる硝煙の香りだった。

「ふう、外した……」

ぽつりとこぼした。

「つて……」

風画が拳をわなわなと震わせる。

「殺す気かアアアアアア！！！！！！……」

地が割れそうな程の怒号。しかし、宗駕氏はたじろぐことなく言った。

「ああ、殺す気だ。この程度で死んだら、オレの子供じゃねえ！！」

『ふざけんなアアアア！！！！！！！！！！』

三兄弟が一斉に叫ぶ。

「はいはいはい。じゃあ次は……」

銃を構えたまま、銃口をゆっくりと左右に振る。その際、銃口は飢えた獣の目の様に、ギラギラ輝いていた。

「競賀！！」

言葉と同時に発砲。

「うぢよっ！！」

妙な声を発し、カエルの様に飛び出す。散弾はソファを直撃し、競賀の座っていた所の綿を盛大に巻き上げる。

「良いぞ。それでこそオレの三男。ナイス末っ子！」

意味の分からない賞賛を見ると、今度は海雅に狙いを定める。

「海雅ちゃん」

「またも、声と同時に発砲。」

「なにおう！！」

海雅は横に跳びずさる。元サッカー部員でキーパーもやっていた海雅にとって、さほど難しい事ではなかった。

二発目が当たったソファは綿を吹き上げ、ゆらゆら揺れて後ろに倒れた。海雅はその陰にさっと身を隠すと、昼間のクリップボードを風画に投げつけた。

「風画！ フォーメーションZ！！ しっかり頼むぞー！！」

海雅の声を聞き風画が振り返ったとき、風画の肩にクリップボードが当たる。風画はそれを地面に落ちる前に拾い上げると、背後の父を気にしながら目を通す。B4版の紙の一番下に、赤ペンで囲われた一文があった。

『フォーメーションD 風画は囹 海雅は逃げながら警察へ通報』

そして、その最後に走り書きでこう追加されていた。

『競賀は風画と共同戦線を張る』

しかし、その一文には赤線が二本引いてあった。

クリップボードに書かれた無機質な一文に、風画は言いよつの無い絶望を痛感する。そして、二人に抗議しようと彼らの方を向くと、

「せいじゃ。後頑張って」

「死ぬなよ。風画兄貴」

そう言って窓に向かって駆け出す。しかし、宗駕氏はそれを見逃さなかった。

「甘いわ！ 小僧共！！」

そう言って、二人の足下に立て続けに二発発砲。散弾がカーペットごとフローリングの木材を荒く削る。

「逃がすかよ！」

宗駕氏は卵大の何かを彼らに向けて放った。それが地面に触れた

瞬間、強烈な閃光と爆発音が二人を襲う。これはスタン・グレネードと呼ばれる兵器で、光と音で人を脅かすための物である。脅かすだけなので致死性は無いが、テロの鎮圧などによく使われる。

「うわっ、まぶしー!!」

「なんだよ、これはー!!」

二人は手で目を覆ってよろめく。

風画が啞然と二人を見てる間に、宗駕氏は箱の中身を全て出した。「さあて、逃がしはしないぜ……」

そこには、全身フル武装で不敵に笑う宗駕氏がいた。

フル武装の宗駕氏と、それと対峙する白狼三兄弟。両者が睨み合う中、風画が静かに口を開いた。

「覚悟決めるぞ……」

「おう!!」

二人は同時に答えた。

「競賀！ そっちは段差がある！ 気をつけろ!!」

「海雅兄貴！ 後ろ取ったら容赦するな!!」

「アブねえ、かすった!!」

白狼家から徒歩数分の大きな公園にて、四人の壮絶な戦闘が繰り広げられる。

ショットガン、スタン・グレネード、手榴弾、コンバットナイフ、オートマチック数丁、ベルギー製マシンガン、エトセトラ、エトセトラ……。以上の物を武装した宗駕氏は、火酒の勢いも手伝って、鬼神の如く暴れ回る。銃弾が木々を引き裂き、爆弾が地面をえぐる。カップルで静かに賑わうはずのイブの公園は、四人の男が戦う戦場へと姿を変えた。

三兄弟は釘バットやバタフライナイフ、自転車のチェーンなどで応戦するが、飛び道具にはなかなか敵わない様だ。一定の距離を保ちつつ追いつめるが、決定打が出ない。しかし、それは相手と自分たちの装備を見れば当然の事である、未だ、一人の負傷者が出てい

ないのが不思議なくらいだ。

「わはははははは！ 兄弟上等！！ どっからでも来い！！！」

ベルギー製のマシンガンを乱射する。すると、金属製の箱形のゴミ箱が、ものの数秒で蜂の巣と化した。

「チクシヨウ！ 誰か後ろを取れ！」

風画は弾丸の雨の中叫ぶ。

「駄目だ、片手でショットガン構えてる！」

競賀が花壇のレンガに身を潜めつつ言った。

「食らえ！ うおっ！ アブねえ！！」

海雅が水飲み場のコンクリートを盾にして電動ガンを発砲する。

しかし、水飲み場に舞い落ちた手榴弾が炸裂し、ギリギリで爆発から逃れる。

全員が苦戦を強いられる。しかし、圧倒的不利な戦況であったが、徐々に戦況は三兄弟に傾きつつあった。酒に酔った宗駕氏の足取りが重くふらつき出し、動きが鈍ってきたのだ。

「行けるぞ！ 確実に近付いて一気に倒せ！ 肉弾戦はこっちが上手だ！！」

風画がそう叫ぶ。

そのおり、IQ二〇〇の競賀が閃いた。

「兄貴。ここは俺に任せて！」

競賀はそう言うのと、宗駕氏に向かって走り出す。

「親父。親父の弾丸、全部避けてヤル！！」

競賀はそう言って、何かを持ち上げ何処かへ放った。

「さあ来い！！」

競賀は踵を返し走り出す。

「あ、逃げた！」

「この卑怯者！」

風画と海雅が口々に文句を言う中、宗駕氏は高らかに笑った。

「がっはははははは！！ 逃げたって無駄さ！！ 絶対に逃がさねえ！！！」

競賀を追い走り出す。風画と海雅も、その後を追う。
その時だった。

（かかった！）

横目で後方を確認していた競賀は、己の術中に父をはめた事を確信した。

「！！」

突如、宗駕氏を追っていた風画の視界から、宗駕氏が消えた。

「え！ どこに……！！」

周辺を見回す。

「風画兄貴。下だよ、下」

競賀はそう言っ、地面を指差す。風画がそれに従い下を向くと、そこにはマンホールにはまった宗駕氏がいた。

宗駕氏は観念したのか、俯いて瞑目していた。

「ふいい、なんて傍迷惑な親父だ」

服についた埃を払いながら海雅が言う。

「コレだから、帰ってくるのイヤなんだよ……」

風画は地面に力無く座り込んだ。

「でもさ、以外と単純っていう弱点も見付かったじゃん。これなら、次からは大丈夫」

競賀は自信満々に言った。

「まあな、何はともあれ、一件落着だ。さあ、親父、帰るぞ」

風画は立ち上がって宗駕氏から武器類一切を取り上げると、彼をマンホールから引きずり出した。すると、宗駕氏は糸の切れた操り人形のように、その場に俯せになった。

「??？」

三兄弟は不審に思い、揃って宗駕氏の顔を覗き込む。

「グー……。グー……」

宗駕氏は、暴れ疲れて寝入っていた。

最高のクリスマスプレゼント（前書き）

今回は感動物です

最高のクリスマスプレゼント

暴れ疲れた父親を自宅に運ぶと、海雅と競賀もリビングで寝込んでしまった。

風画はそんな三人に毛布を掛けると、庭に出て携帯電話で電話を掛けた。一二月末の夜風は冷たく、戦闘で火照った風画の体の熱を冷ます。

電話の相手は一番大切な人、美奈である。

『……風画くん……？』

「もしもし。美奈？ あ、今日はホントにゴメンな」

最初の一言を謝罪で始める。

『……うん。でもしょうがないよね……。お父さんが帰って来たんだよね。それに競賀くんにも合ったし、家には海雅兄さんもいるし、久々の一家団欒はどうだった？』

いつもと変わらぬ、暖かくて優しい口調の美奈。『怒ってないな』と悟った風画は、美奈の問いに答えることにした。

「ああ、すごく楽しかった……。かな？」

風画はほんの一時前前の事を思い出し、言葉の最後に疑問詞で締めくくった。

『ふーん。変なの……。』

「美奈。今日はホントにゴメン。七福の馬刺、絶対おごるから許して」

風画は申し訳なさそうに詫びる。しかし、美奈の答えは意外な物だった。

『ううん、いいの。あれは、ちょっと悔しくて勢いで言っちゃったから……。七福の変わりにさ、一緒にお寺でカウントダウンしよ。そしたら許してあげる』

「美奈……。うん、わかった」

心優しい美奈の思いをひしひしと噛みしめ、風画は目を瞑った。

その時だった。

『うわあ……』

電話の向こう側から、何かに感動したような美奈の声。

「どうした？」

『風画クン……。すごいキレイ……。空、見て……。』

美奈に促される様に空を見上げる。すると、天上から小さな冬の天使が舞い降りてきた。

「……」

『雪……。ホワイトクリスマスだあ……。』

どつりで寒いはずだ、と風画は思い、コートを着直した。

「これを、美奈と一緒に見れたら……」

『ワタシも、同じ事考えてた……。』

電話越しに空を眺め、互いに言葉を失う。

「美奈……。一つ言いたいことがあるんだ……」

『何……。』

「愛してる」

風画はそう言うなり電話を切った。その直後、美奈からリダイヤルされたが、それを無視して携帯をしまった。

「ちよつと、クサかったかな？」

微かに笑みを浮かべ、そのまま家に帰った。リビングの大窓を開け、床に腰掛け地面に足をつけ空を見上げる。

空から無限に限りなく近い雪が降る。風画はその光景にしばらく見入っていた。

どれほど時間が経ったであろうか、そんなことを風画が考えた頃、空からまばゆい白く淡い光が降りてきた。

「何だ？」

風画はその光を追った。光は地上に触れる寸前、地上一メートルほどのところで静止し、風画と向かい合う形となった。

「……？」

光に対しての疑問が湧く中、その光は段々と人の形に変わって行った。

風画はある程度変形した光を見て、確信した。

「母さん!？」

光の正体は、風画が幼い時に亡くなった筈の母・白狼由里であった。

「……風君ね」

由里は目を開け風画と向かい合う。白く美しい肌、背中まで届くウェーブの掛かった黒髪、目鼻立ちはスッキリと整っており、微かに競賀に似ていた。そして、一番特徴的なのは、最中から生えた白い羽である。

「……………」

口を開けてぽかんとする。

「フフ、久しぶりね。お母さんが死んじゃってから、もう十年近く経つね。これまで、元気だった?」

「う、うん」

戸惑いながら頷く。

「そうね、風君、元気な子だよ。お母さん安心した、元気そうで優しい瞳は、風画を真っ直ぐに見詰めその中に風画を映す。」

「でもね、美奈ちゃんを泣かせちゃだめだよ。でも、仲直りしたみたいだね。これからもちちゃんと守ってあげるんだよ」

そう言っ て優しく微笑む。

その時、風画は我に返った。

「あ、母さん。待ってて、みんな呼んでくる!」

踵を返し他の家族を起こしに向かった風画を、彼女が止めた。

「待って、時間が無いの、このまま、風君とお話したい」

「母さん?」

風画が振り向いた瞬間、まばゆい存在の由里は、その細い腕で風画を抱きしめた。

「風君、ゴメンね。風君の目の前で死んじゃって。恐かったよね?」

寂しかったよね？ 本当にゴメンね、こんなお母さんで……」

由里は風画が幼稚園に入っただけの時の、交通事故で亡くなっている。しかも、幼き日の風画は、母が車にはねられる瞬間と、握った手が力を無くす瞬間を両方とも経験しているのである。風画は白狼家の中で、一番母の死を体感したのである。そして何より、風画にとって母親の記憶はそれだけしかない。風画は母親の死に様でしか、母親を覚えて無いたのである。

風画は自分の頬を伝う熱い物を感じた。彼女は泣いていたのである。

「みんなによろしくね。もっとお話したかったけど……」
そう言つと、由里はふわりと宙に浮く。

「え、母さん。どこへ？」

「天国よ。もう行かないと」

「待つて。まだ話したいことが」

風画は手を伸ばした。しかし、由里の手が風画の手に触れる事は、もう二度と無かった。

「！」

風画は目を覚ました。風画は庭の真ん中で寝ていた所を、携帯の着信で目覚めたのである。

携帯は、美奈からの三度目の着信を伝えていた。

「もしもし」

『風画クン。さっきの何？ よく聞こえなかったんだけど……』

「いや、何でもない。それよりさ、俺さっき……」

風画は母親の夢を見たことを美奈に伝えようとした、しかし、風画の背中と頬に残る暖かさ、地面に落ちる一枚の羽、そして何より、空を見上げたとき、真っ先に目に飛び込んできた明るい星、天に輝く天狼星シリウスがそれを阻んだ。

「いや、なんでもない。じゃあな、おやすみ」

風画はそう言つて電話を切り、羽を拾つて家へと向かった。

家の床に降り立ったとき、気持ちよく眠る家族に風画はこう叫んだ。

「てめえら！！ 母さんの墓参りに行くぞ！！ 起きろ！！」

直後、一斉に飛び起きる。

「何だよ、いきなりいゝ」

「ふわぁーあ、ロスに行かないと」

「ねみいゝゝゝ」

口々に文句を言う彼らを尻目に、風画は心の中で言った。

（母さん。最高のクリスマスプレゼント、ありがとう。これから、俺たちがプレゼントをあげるね）

風画は羽の芯を人差し指と親指で回していた。

全員集合！！その後・・・

白狼一家は夜遅くにも関わらず、母親の墓参りをした。途中、ブーと不平を漏らす海雅と競賀は、散々風画にどつかれ、宗駕氏もまた、二日酔いで辛い体を風画に散々引っぱたかれた。

墓参りの際、墓石に花を飾るべき所に、風画は庭で拾った羽を捧げた。

墓参りを終え家に帰ると、宗駕氏は直ぐさまロサンゼルスへと発った。無論、自宅の庭にヘリが着陸する騒ぎとなったが、『夜の方がすごかったなあ』と三人同時に呟いた。また、公園での発砲事件は、面倒事を嫌う地元警察の手によってうやむやになり、事なきを得た。

宗駕氏が経ってから数時間後、今度は競賀が家を去った。次の大学はロシアのムカチャッパ大学と言うらしく、飛行機が一日一便であるというのだ。名残惜しさを噛みしめながら、競賀は自宅を去った。

競賀に続き、今度は海雅が家を出た。どうやら、『日本全国無銭旅行』という物をやるらしく、どこかい荷物を自転車にくくりつけると、そのまま自転車を漕いでどこかへ行ってしまった。

最後に、家に残された風画とレックスは、互いに一度見つめ合ってからいつも通りに散歩を始めた。その途中、近所のおじさんや商店街の人とすれ違つと、彼らは快い挨拶を交わした。これが、彼らの日常であり、一日の始まりでもある。

散歩から帰ると、風画はいそいそと部活に行く準備を始めた。今日は他校での練習試合で、鞆の中にユニフォームとバッシュを突っ込むと、制服に着替える。そして、家を出るときに、テーブルの上の写真、白狼由里と赤ちゃん時代の風画の写真を見てから、「いつてきます」と告げレックスに留守番を頼んで駅へと向かう。

風画は駅へ行く途中、喫茶店でコーヒーを味わう槍牙と出会った。しばらく槍牙と一緒に喫茶店で時間をつぶしている間に、今度は美奈がやってきた。三人でテーブルを囲っていると、他の部員が続々と現れ、彼らは店を後にした。

その日、風画のチームは男女とも全試合快勝でその日を終えた。しかし、風画の顔に浮かぶ満足そうな笑顔は、試合の勝敗云々ではなく、最高のクリスマスプレゼントによるものだった。

全員集合！！　その後・・・（後書き）

完結しました。ここまで読んでくれて本当にありがとうございました。あらずじに書いたように、最後には感動秘話を書いてみました、初めての試みだったので、その出来映えは賛否両論あるとは思いますが、それでも私は読んでくれただけでも満足です。

今回は、いつも強い風画の裏の部分や過去を全て載せ、読者の方々に、もっと風画を知って貰おうというコンセプトで筆を執りました。私はここまでの話を一旦読み返した上で、書けるべき所は余す所無く書き切れたと思います。

それでは、改めまして、最後まで読んで頂き、誠にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3022a/>

聖夜だよ！！ 全員集合！！

2010年10月8日15時49分発行